

人間の尊厳性の問題(2) : ホワイトヘッドを中心に

高田, 熱美

<https://doi.org/10.15017/235>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 21, pp.23-32, 1994-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :

人間の尊厳性の問題 (2)

— ホワイトヘッドを中心に —

高田 熱美

The Problems of the Dignity of Man (2)

— Centered around Whitehead —

Atsumi Takada

The aim of this paper is to clarify the problems of the dignity of man with special reference to the philosophy of Alfred North Whitehead.

The Constitution of Japan and its fundamental law of education declare man to be dignity, and so it is said that the ultimate aim of education is to exalt the dignity of man.

What is the dignity of man?

Does this mean that man is superior in dignity to all other living things?

In Christian thought, man is created by his Creator, and moreover he alone is “*imago Dei*”.

Today, man begins to think of himself as almost a God.

Whitehead proposes “the philosophy of organism”. This philosophy seems to approximate more to some strains of Indian, or Chinese, thought, than to western Asiatic, or European, thought. One side makes process ultimate; the other side makes fact ultimate.

According to Whitehead, the world, being constructed out of incidents called actual entity, is process, or occasion that all actual entities are joining in creation of cosmos. Therefore, the world is self-creative, and the actual entity as self-creating creature passes into its immortal function of part-creator of the transcendent world. As a result, all existence, including election, chemical elements, matter, soil, plants, animals, man and so forth, is equal in value. Man exclusively, can not occupy the name of dignity in this world.

To conclude, only man can think about himself and nature, and so he should assume the responsibility for all the living nature. Thus, the aim of education needs to be transferred from this point of view to the better one.

はじめに

すべての個人の尊厳が唱えられる時代とはなかった。「すべて国民は、個人として尊重される。」(憲法13条)「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期する…」(教育基本法前文)、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真

理と正義を愛し、個人の価値をたっとび…」(教育基本法1条)、「人間は品位をもち、不可侵の尊厳を有する。」(中央教育審議会答申、期待される人間像)、「本法ハ個人ノ尊厳ト両性ノ本質的平等トヲ旨トシテ之ヲ解釈スヘシ」(民法第1条の2)。

これらは、いずれも、人間一人ひとりの尊厳

を明示したものばかりであり、人間としての個人は、自由と平等とを不可侵の権利としており、性、地位、門閥、職業、貧富を越えて、尊重されるのである。それゆえ、児童・生徒もまた独立したかけがえのない存在と見られる。個人の尊厳は国家、社会及び教育の絶対的原点なのである。

しかしながら、この原点なるものに対しては、たえず問いが投げかけられ、多様な解釈が施されるのである。たとえば、ホッブズが国家（法）と個人との関連を説いたことから明らかなように、個人の尊厳を功利的観点から見ることもできるのである。即ち、彼が語ったように、個人の本性がそれぞれ利己的にして闘争的であるとすれば、個人相互の生存のために、個人の尊厳を法によって説いた方が良くともいえるのである。それゆえ、ここでは、個人の尊厳とは相互の共存を支える方便ということになる。

このような観点からいえば、個人は国家・社会のみならず、他の個人に奉仕すべき手段へと変り易い。その危険はつねにある。自然科学を基盤にしている臨床医学の領域にもその傾向は見られる。ここでは、「脳死判定基準」なるものを作成して、「ベッド待ちの患者」や「臓器入手希望の患者」をつくり出す。何はともあれ、ある個人を生かすために他の個人の死が待たれるという状況が生れる。

本来、個人の尊厳とは個人を人格即ち目的としてとらえ、手段としてみるのではないということであろう。個人自体が他の何ものとも代替できない目的であることをいうのである。にも拘らず、現実には個人の尊厳は手段と化し、風化し、消費の対象とさえなる。ここには、個人対個人の矛盾・葛藤のたえざる克服ということが課題になるであろう。

さらに、もうひとつ、人間の尊厳 (homo dignitas) そのものの問題がある。個人の尊厳は、個人と個人、社会、国家、法のレベルでその意味を成立させている。これに対して、人間の尊厳は自然・宇宙における人間の地位を換喩するかに見える。少なくとも、個人の尊厳が人間の社

会に閉ざされているのに比して、人間の尊厳は宇宙的な意味を示している。そうであれば、個人の尊厳の問題は、それを越えて、人間の尊厳という地平で探求されねばなるまい。

この小論は、かかる探求をホワイトイヘットの哲学思想を中心に進めながら、人間の尊厳についての新たなパラダイムを示そうとしたものである。

1. 尊厳への問い

わが国には人間の尊厳なるものへの意識はなかったのではないか。元来、尊厳なる言葉は人間のものではなかったのだ。『字統』によれば、尊とは、酒樽を神霊の前に置いて祀るの意であるという。また、嚴は、祝祷のおごそかであること、神霊につかえる心意をいうのであった。したがって、いずれも超越者たる神への奉意を示すものであり、人間に冠せられる言葉ではなかったのである。

尊厳なることばが、人間のものとして考えられ始めたのは、西欧では、ルネサンスの頃からではないか。周知のようにルネサンスは人間の可能性を高らかに謳った時であった。これは生身の人間を肯定することでもあった。人も知るレオナルドの《最後の晩餐》はこれを証左するものであった。なぜなら、この絵が示す線遠近法は、人がいま、ここに立って見ることを語っているからである。これは自らの住む空間と眼とを肯定しているのである。

人間の尊厳性はこのような状況において語られる。たとえば、マネテイの『人間の尊厳と卓越』(1452)、あるいは、ピコ＝デラ＝ミランドーラの『人間の尊厳 (Oratio de Homine Dignitate)』(1486) がここに登場する。そもそも、「人間の尊厳」を論じようとする試みが新しい時代の到来を思わせるのであるが、ミランドーラは正面切って人間の尊厳を説く。彼の時代にあっては、人間だけが心と体 (spiritual-material)、見えない世界と見える世界にまたがって存在するマイクロコスモスであるとする見方があった。この見方は、永遠と有限の時とに関わっており、人間

は、その間に在る者、いわば天と地の中間者であるということに通低する。ミランドーラは、この見方に不服で在った。彼は、自由な意志こそが人間の人間たる所以と見る。人間は、自らを創造する自由を有し、自分で自分の生き方ないし本性を決めることができるのである。ミランドーラにとって、これが人間の尊厳ということであった。

時は下がるが、パスカルにも人間の尊厳についての論述が見られる。人口に膾炙している『パンセ』の、「人間は考える葦である」は、人間の尊厳が思考にあるという。人間は、いかに弱く、微小であるといえども、考えることによって宇宙のすべてをも包んでいる。人間は考えることにおいてすべてであるのだ。無限の時間と空間が人間に思考のうちに在るのだから。

しかしながら、自由や思考が人間の尊厳になりうるであろうか。それが、仮に、素晴らしく、誇らしく思われるとしても、それによって人間に尊厳の名を冠することはできないのではないか。実は、ミランドーラもパスカルもそのことは熟知していたはずである。いうまでもなく、彼らは、キリスト教の神を生きていたのであり、とりわけ後者は、キリスト教こそが真の宗教であることを世間に説くことに全エネルギーを傾注したのであった。彼らにとって、人間の尊厳は神に由来するのであった。自由も思考も神によって与えられたものであり、神によるがゆえに尊厳あるものといえるのである。それは尊厳ある神のかたどり (imago Dei) であるのだ。したがって、神がなければ、人間の尊厳は水泡に帰すのである。

かのデカルトは、考える私を認識の原理として、世界を構成し、人間理性の超越性を主張したが、神が否定されたわけではなかった。人間理性に明晰判明な生得観念（たとえば数学的観念）及び世界における自然法則に神の摂理が認められているのであった。但し、デカルトの理性は、信仰を希釈した合理的なものであり、これによって人間は自然世界を支配する橋頭堡を築いたことになる。したがって、神は人間の理

性を支持する方便へと変えられている。

カントは、デカルトの衣鉢を継ぎ、理性が世界を構成すると見た。構成された世界は因果律が支配する現象界であった。他方、カントは、それを越えた、自由な人格が存在することを認める。人格こそが対象化不能なもの、交換できぬ、かけがえのない、それ自体目的であるもの、従って尊厳あるものであった。

しかし、人格の尊厳は、やはり神に帰せられるであろう。カントにおいても、人間は「理性的被造物」であり、道徳の主体としての人格は、背後に神をおいているのであった。この神は、実践道徳の観点から要請されたものであるが、それなしには、人格の尊厳は意味をなさないのであった。

シェーラーは、人間を生命のレベルで解明しようという新しい試みを示した。彼によると、人間と他の生命の間には決定的な相違があるという。それは、「人格それ自身の傾注 (Einsatz der Person selbst)」⁽¹⁾、いわば自己意識であって、これが人間に宇宙における尊厳ある地位を与えるのであった。とはいえ、この自己意識も、究極的な基礎づけとしての神を背後にしている。

このように見ると、人間の尊厳は超越者たち、神に由来するのではないか。もちろん、神は論証されうるものではあるまい。神の論証なるものはすべて偽証であるといえよう。神は要請されるものか、信によるものかである。決定的なことは神への信であろう。とすれば、人間の尊厳なるものは、キリスト教の神なしには語りえないのではないか。

周知のように、ハイデガーには、人間を思い上った人間主義（たとえばデカルトの空いばり）から解放するべきだとの思いがあった。彼によれば、デカルトのように人間が真理を構築するのではなく、真理そのものが人間を通じて開顕するのであった。真理は、キリスト教的な神ではない。それは存在と称される。もちろん、ハイデガーにとって、あらゆる存在者のうちで、ひとり人間のみが存在の声に呼びかけられて、存在者が存在するというあらゆる驚異のなかの驚

異を経験する。⁽²⁾そして、人間だけが、外にある(ex-ist)ことから、存在に身を開き、存在を思考する。それゆえ、存在が明るみを見せるのは人間においてであって、これは人間が存在を問わざるをえないことを意味するのである。

かくして、ハイデガーによれば、人間はそれ自身の存在を問題とすることによって、存在を問う存在者即ちその場(Da)において存在(Sein)の視点が生れる現存在(Da-Sein)なのである。この場合、現存在と存在とは昼と夜のような相即性であって、現存在は存在なしには在ることはできない。

では、存在とは何か。それは否定的な命題によってしか語りえぬことであろう。たとえば、ハイデガーの存在は、キリスト教的な神ではない。人格的神のようなものではなく、むしろ自然の生命の息吹きと称されるべきもので、それは存在するもののすべてを現に在らしめている何かであった。しかし、それはスピノザの神のようなものでもない。スピノザの神は、たしかにペルソナを有さないが、生きた問題性を欠いている。スピノザの神において人間は安住できるが、ハイデガーにおいては、存在と存在するものたる現存在・人間とは問いかけられ一問うという緊迫したダイナミズムがある。

神の時代の黄昏の中で、ハイデガーは古い神を存在という新しい神に置き代えたともいえる。けだし存在もまた超越的な何かであるのだから。しかしこの存在即ち「ある」は、人間に存在の意味を見出せるものではあるが、人間に尊厳を称えさせるものではない。ハイデガーの心底には、ヨーロッパの人間中心的思考を根こそぎ覆し、生成する自然を甦らせるという企てがある。もちろんこの自然とは、形而上学的な存在であり、彼の力点は、人間の力ではなく、人間において存在を見るということにあったのである。

他方、神を放棄し、なおかつ形而上学を拒否する人びとがある。たとえば、英国経験論のなかでもヒュームの系統にもいたラッセル、あるいは分子生物学者モノー。前者は若い時、物理

化学的宇宙には人間が生きる意味を見出しえないこと、それゆえ、人間は自分で自己を評価し、生きる意味を創造すること、それが「人間の尊厳を高める」⁽³⁾とした。後者においても、人間は他の生物と同じように、遺伝情報が翻訳されて生じたものであって、ここには、人間的価値とか尊厳とかはないのである。したがって、人間は無から自己の価値を創造しなければならないのである。

ラッセルにもモノーにも神はない。これは、デカルトの考える自己・理性が内実としていた人間中心主義の帰結であろう。もはや、ここで語られる尊厳は人間のみ尊厳に閉ざされ、そこから個人の尊厳が派生し、次いで自由と平等が説かれ、そしてこれは自我の恣意へと雪崩を打ち始めるのだ。

2. さらなる人間の尊厳への問い

物理化学的世界は人間をも抽象的な粒子へ還元する。これは人間が生きられる世界ではない。それどころか、人間とは何かという問さえ生れることはない。

一方、生物学ないし生態学は、人間について新たな光を投げかける。ここでは、人間は動物の延長上にある。とはいえ、化石人類学及び霊長類学の知見が示すように、人間はその延長上にあっても、なお特異的な動物ではあった。

今西錦司によると、生物は自ら環境を選び、自己の生活の場をつくりあげて行く。その場合、それぞれの種は無益な競争を避けて、環境をすみ分けるのである。たとえば、四種のカゲロウの幼虫は、その強弱に関係なく、それぞれ、ゆるい流れ、中位の流速、急流などに独自にすみ分けることによって共存するという。チョウ類について言えば、アゲハチョウは柑橘類の葉、アオスジアゲハはクス科の葉、オオムラサキはエノキの葉を食べている。サバンナの有蹄類においても食物とする草の種類が食べ分けられている。また、食肉獣は草食獣を捕食するが、これによって草食獣の個体群が適切に維持されている。哺乳類はポピュレーションが過密化すると

多くの生理障害が起こり、病気、衰弱によって死に至る。したがって非捕食獣と捕食獣とは共生しているといえるのである。

数十億年にわたって、生命は、競争を避け、生活の場を住み分け、自己の環境をつくりあげてきた。これは共生の秩序をつくることによる進化なのである。⁽⁴⁾ところが、人間だけはこの秩序から逸脱した。共生の代りに競争を選び、自然の破壊、種の殺戮、戦争の歴史を生きてきた。デカルトとダーウィンはこのような人類史を肯定しているのではないか。そして、人間の尊厳性なるものはまさに人間の自己中心主義に他ならないように見える。

ニーチェは、シェーラーに先立って、人間を動物界へ送り返し、人間の尊厳を打ち砕いた。ニーチェは人間を「動物の一変種」としてとらえる。この動物は、大地の「病気」、動物界から逸脱した、できそこないの、いまだに確立されぬ動物、動物界の没落を語る頹廢的な動物であって、それがゆえに問題なのであった。

かく見ると、普遍的と見られてきた人間の尊厳は瓦解する。人間は「犬畜生」に及ばないのではないか。人間の尊厳とは何か。

3. ホワイトヘッド

人間の尊厳は、人間が自分のために他の生命を支配することができるという意識の裏返しではないか。そして、個人の尊厳とは、人間という種の内部抗争を調整する合理的機能以上のものではないのであるまいか。たとえば、自然科学的医療は、動物の臓器を人間に移植することを試み、人間相互においては、臓器待ち、即ち脳死を待つ患者をつくり出している。臓器移植が、与えるものと受ける者との契約、信愛に基づいているかどうかは問題ではない。自然科学はそれを視界に入れずに目的を遂行するのである。何のためか、それは無明のままである。

人間の尊厳は宇宙的展望のなかで再構築されねばならないであろう。

想えば、マルティン・ブーバーは、世界に対する人間の関与を二つの根源語、「われ—なん

じ]、「われ—それ」で表わしたが、「われ—なんじ」は、自然の樹木や動物たちとの間においても成立するのであった。人は、樹木において、あるいは馬において、樹木そのもの、馬そのものに出合うのである。存在そのもの、即ち〈なんじ〉と〈われ〉との根源的関わりがここに生起するのである。⁽⁵⁾ブーバーは、これを対話という。対話があるところでは、したがって、支配するものと支配されるもの、優者と劣者は存在しない。もちろん、人間への問いが反省的に問われるとしても、人間のみが尊厳が問われることはない。そこには、在るものの結びつきが在るのみである。

ブーバー以上に、人間と宇宙自然との等価的関りを形而上学的システムとして語った者がある。ホワイトヘッドである。

「宇宙には価値あるものを生み出す一般的傾向があります。」「この創造原理はいたるところに、生物体にも、いわゆる非生物体にも、エーテルにも、水にも、土にも、人間の心にもあります。しかし、この創造はひとつの連続的過程であり、しかも〈過程はそれ自体で現実能なのです〉。」「⁽⁷⁾この創造の過程に参加することは、したがって、あらゆるものにかかれており、それゆえ、あらゆるものに価値があるのである。これは、人間においても同様であって、ホワイトヘッドは、「宇宙における共同創造者としての人間の真の運命こそ、人間の尊厳であり、崇高さなのです」⁽⁸⁾と語る。

なぜこのようなことが言えるのか。この形而上学的発言の基礎になるものを今少し、検討してみよう。

ホワイトヘッドは現実的実有 (actual entity) という概念を説明のために導入する。現実的実有とは、「世界がそれから形づくられる最終的な実在的事物である。」「⁽⁹⁾この事物は、デカルトの理性が処理する量としての物体、あるいは、分割されない最小の単位としての実体の如きものではない。実体は固定している。実体は、他からの力が加わなければ、自ら動くことはない。アリストテレス以来、実体はそれ自体、孤立し、自

足して、一定の位置を占める不変のものであったのである。

この実体観念は言葉によって確定される。言葉は、物体のみならず出来事をも確定して、それを不変の実体へと同定するところがある。すると、これが主語となり、それに述語が結びつけられ、主語—述語（実体—属性）という命題が成立する。

これに対して、ホワイトヘッドの現実的実有は、過程、契機、出来事を意味している。因に、ホワイトヘッドの弟子ラッセルにも同様な見方があったが、⁽¹⁰⁾ ホワイトヘッドは、さらに探究を進めて、世界と人間を解明しようとする。

ホワイトヘッドは、旧来の実体概念を否定する。実在としての現実的実有は、時間・空間にあまねく拡がっている、ある種の活動、いわば、場が重なり、交わっていること、即ち場の収斂なのである。それゆえ、現実的実有は、あたかも、古代仏教の縁起説のように、すべてのことは、自足的に存在するのではなく、因果の流れのなかで生ずるのである。⁽¹¹⁾ したがって、現実的実有は、静止した物体でもなく、たんに動き廻るだけの死物でもない。周知のように、原子、素粒子、細胞、振動弦などがいずれも自己運動し、他に関わっているように、現実的実有は他の実有と関わり、ついには、その客体となって把握され、さらに、後者の実有は後続する次の実有に把握されるということくりかえしているのである。

これを見ると、ホワイトヘッドが、現実的実有の概念を量子力学の知見から得ていることは明らかであろう。周知のように、量子力学は今までの実体概念を根本から覆したのであった。ホワイトヘッドはこう語る。「物理学は、自然的契機をエネルギーの場所と見ている。その契機は、他の何であろうと、そのエネルギーを住みこませている個的事実である。」⁽¹²⁾ 電子、陽子、光子、波動、速度、光線、化学元素、物質、真空、温度、エネルギーなどは、各契機がそのエネルギーを含む仕方によって違っているのである。したがって、「これらの違いは、エネルギーの流れ即

ち当の契機がそのエネルギーを自然の過去から継承し、未来に伝えようとする仕方によって全面的に構成されている」⁽¹³⁾ といえる。

このように、現実的実有は、現代物理学の知見を含んでいる。但し、これをもって、ホワイトヘッドが唯物論に立っていると見るのは誤りである。現代物理学から唯物論が導かれることはないし、何はともあれ、現実的実有は物質ではなく場であり、しかも物的かつ心的な特性を有しているといえるからである。つまり、現実的実有は物心双方の極を保持しているのである。

ホワイトヘッドには、デカルトの思惟＝自己による世界の構成化はない。またカントのように、現象界に自然科学をおき、物自体を超越界におくという世界理解はない。ホワイトヘッドは経験から出発する。そしてこう語る。「われわれの経験活動のうち、いずれを心的、物的と称するかは、まったくの約束事なのである。したがって、実際には経験の中の物的構成と心的構成との間に引ける適切なラインなどはない。」⁽¹⁴⁾ 無期と有機、生きたものと死んだもの、電子、鉱石、植物、動物、人間、神、すべてが現実的実有である。それゆえ、無機物もその分に応じて心的であり、経験し、感じ、創造するのである。つまり、すべての現実的実有は、過去の因果によって限定されながら、同時に前に向かって創造するのである。いわば、現実的実有の心的極とは創造性であり、物的極とは因果的限定即ち物的記憶である。けだし、ホワイトヘッドによれば、「因果作用と物的記憶とは同じ源から生じている。両者ともに物的知覚である」⁽¹⁵⁾ からである。

ところで、ホワイトヘッドは自己についてこう語る。自己認識とは、「身体的な出来事に内在していて、ひとつの複雑な統一体として自らを知ることである。」「かくして、われわれは自らを自ら以外の事物の多くを統一する機能として知る。」⁽¹⁶⁾ こう見ると、ホワイトヘッドがいう自己とは、統一体としての身体であり、それは統一する機能であることになろう。さらにホワイトヘッドは語る。「諸契機から成る、われわれの

生命の縫い糸に行き渡っている自己同一性についての意識は、自然という一般的統一性の内にある、ひとつの特殊な統一性のより糸の知識に外ならない。⁽¹⁷⁾したがって、自己とは、経験即ち因果の織物の結節にして創造への契機ということもできる。いわば、自己とは過去を記憶し、未来を予想する創造的統一体である。

このことは人間のみが格別の地位に在るというのではない。無機物は心的側面を極小とするが、心的側面が無であることを意味しない。人間と無機物との差違は相対的であって、本質的差違ではない。それゆえ、存在するもののなかで、無意味かつ無価値なものは何もないのである。あらゆる現実的実有は「自己創造的被造物」⁽¹⁸⁾である。あらゆるものが有機的に交流し、作用し合い、価値を実現しているのである。たとえば、大気は酸素を有して人間の身体に入り、人間を生かす。これは肺臓を通じ、血液を流れる。このとき酸素は身体そのものであるのだ。水も然り。この場合、大気と身体、水と身体との区別をどこで引くのか。そのラインは確定できるものではない。環境と身体とは連続しているのだ。身体は、環境の中で、環境によって、環境と共に生きるのである。いわば、身体は、環境に順応し、環境を適正化しながら、環境と共に創造するのである。

身体とは自己である。身体は細胞から成り、細胞は元素から出来上っている。しかし、身体は細胞ないし元素の総和ではない。身体は全体であり、全体は部分の総和を越えている。これが可能となるためには、すでに見たように、実体の観念を変えねばならない。即ち、元素、分子、細胞、あらゆるものが、孤立した単一体ではなく、生きて活動すると見なければならぬのだ。

身体は、自身、身共、御身と称され、統一した独立体である。たとえば、臓器移植に際して、拒絶する免疫反応は、身体の統一性即ち自己同一性の証左である。⁽¹⁹⁾全体は部分の総和ではないのだ。そして、身体としての自己は創造する。創造は心的であって、自由もまた創造の在り様である。人間はこの創造のレベルの高い動物で

ある。とはいえ、これによって、人間のみが他の生命や無機物に対して特別の地位に立つ、と見るのは誤りである。

4. 有機体的宇宙

ホワイトヘッドの宇宙は有機体的宇宙である。この宇宙論から成る体系的哲学はライプニッツのそれに比せられるが、彼のモナドは実体であり、しかも窓をもたないがゆえに、他のモナドとの交流が不可能であった。これに対して、ホワイトヘッドの宇宙は、現実的実有のおりなす有機体的社会である。宇宙は、あたかも巨大な樹木と見ることもできる。秋になって、一枚の枯葉は、樹枝から離れることによって、次の木の葉の誕生を可能にする。さらに、大地に降りた枯葉は、塵に帰した後、樹液と化し、再び樹木戻って行くように、宇宙の現実的実有は、他の現実的実有を把握 (prehension) し、やがて、後続する他の現実的実有の客体 (実体) となって、把握され、新しいものを創造して行くのである。ホワイトヘッドにとっては、宇宙はこのような有機的創造そのものであった。⁽²⁰⁾

人間もまた現実的実有の社会的統合であるものとして、宇宙の創造に参与する。それゆえ、人間は他の在るものと対等であって、人間だけが尊厳あるものとすることはできない。いったい、樹木の中で花だけが尊いと、葉だけが価値があるとかいえるであろうか。有機体であるかぎり、ある部分を格別に見ることはできない。それは、人体においても同様で、たとえば、眼だけが価値があるなどとはいえないのである。

ところで、現代物理学に照応して成立した有機体的宇宙論を壮大な空想と見る向きもあろう。だが、ホワイトヘッドの思索は精緻を究めているといえる。彼は、神もまた現実的実有と見る。この神は、プラトンのなアイデア＝永遠的なものを把握しており、これが創造の方向あるいは根拠となるのであった。但し、ホワイトヘッドの神は万能の神ではない。キリスト教の神は、世界を創造する。その神は万能にして永遠であり、人間はその神に支えられて世界を変え、作る。こ

れに対して、ホワイトヘッドの神は、現実的実有の一つであって、他の現実的実有と抱握し合うことにより、世界を創造するのである。つまりあらゆる現実的実有が創造に参加する。したがって、ここには、つくる一つられる、という主体—客体の形態はない。むしろ、新しいものを生み、新しいものに成る、という相互生成的な関係がある。

ホワイトヘッドの宇宙論はひとつの形而上学であるといえよう。彼はそれを肯定する。彼と同じケンブリッジにいたヴィトゲンシュタインが「私の言語の限界は、私の世界の限界を意味する」⁽²¹⁾「世界とは私の世界である、……この言葉の限界がとりもなおさず私の世界の限界を意味する」⁽²²⁾と語ったことがあった。これによれば、語られるものが世界の内に在ること、そして、人はこの語られうるもの即ち在るものと共に、その中で生きるのであった。さらに彼は語った。「世界がいかにあるかが神秘的なのではない。世界があるというそのことが神秘的なのである。」⁽²³⁾

世界があるということ、その神秘は語られるものではない。しかし、その神秘に驚異して、言語即ち世界の限界を打ち破り、あることについて思索し、問おうとする人びとがある。たとえば、ハイデガー、そしてホワイトヘッド。こうして、ホワイトヘッドはプラトンを逆立ちさせたような宇宙論を構想するに至った。即ち、ホワイトヘッドにおいては、人間も、神や他の在るものと同様、現実的実有であって、等しく価値在る存在のひとつにすぎないのであった。

結び — 教育について —

ホワイトヘッドはいう、「……有機体の哲学は、西アジアやヨーロッパの思想よりもインドや中国の思想がもつ体質に一層近いように思われる。」⁽²⁴⁾ たしかに、両者は共通性をもつ。その一つは、すべて在るものが等価であるということである。

草木叢林の無常なる、すなわち佛性なり（『正法眼蔵佛性』）

これは無常であるものに真実がはたらいていることを意味する。爪の上の小さな塵にも真実は現われているのである。一切衆生、悉有佛性、とはこのような謂であった。これは祈りに連なる。即ち、日常行なわれる会釈（おじぎ）は、その謂を解しようとする試みであり、終局には、佛性を有する者への祈りとなるのである。

会釈（おじぎ）はゴリラやチンパンジーにも見られる。⁽²⁵⁾ そして、会釈は祈りへと収斂する。さらに、祈りは、異種の生命の間にも広げられるのである。たとえば、キャンベルらによれば、各地の狩猟民が伝えてきている動物信仰は、自分たちが殺した動物の靈魂の復活を祈る儀式を不可欠としていたという。狩猟民と動物の間には契約があって、動物は、自分が復活するための儀式を人間が行ってくれるという了解のもとに、その命を人間に差し出すというのである。また、農耕民たちには、大地は神であって、一粒の種子は、切り刻まれて埋められた神の体であり、そこから食用になる植物が生れてくるという神話が見られるという。⁽²⁶⁾ ここには、他の生命を犠牲にして生きる者の、犠牲者に対する祈りがある。

文明においては、人間は自己を神の子であると見たて、祈りを、犠牲となる生命ではなく、神そのものへ向ける。キリスト教の食前の祈りは、神の恵みに対する祈りであって、人間の生命のために供せられるものへの祈りではない。周知のように、プロテスタントの精神は、禁欲を基底にして、勤勉、節制、質素を徳としながら、ついには富を蓄積し、私的欲望を拡大し、自然を破壊するに至った。この精神が根幹とする無私の倫理は、人間に対してではあっても、自然に対してではなかった。自然は収奪の対象となったのである。

もっとも、わが国・文部省の指導要領に見られるように、自然破壊を問題として、自然の尊重を教えようとする試みはある。それによれば、幼稚園では、自然に対する「豊かな心情や思考力」を培えという。小学校では、道徳の章でそれが示される。「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」と称する大項の下で、小

学1・2年では「身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する」「生命を大切にすることを」3・4年では、「自然のすばらしさや不思議さを知り、自然や動物を大切にする。」「生命の尊さを知り、生命あるものを大切にする。」、5・6学年では、「自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。」「生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。」「美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。」とある。また、中学校では、「自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めるようにする。」さらに、高等学校では、総則において、「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」とある。

とはいえ、指導要領においても、人間尊重と自然の生命の尊重とは並置されており、両者の統合はなされてはいない、人間と自然との対峙・分立は、人間の教育そのものを分裂させるのであって、もし、これが統合的に把握されるべきであるとすれば、新たな宇宙論を必須とするのである。これを想えば、ホワイトヘッドが提示した有機体的宇宙論は、分裂を克服し、存在するすべてのものの共生的創造を見出させるよすがとなるであろう。この観点においては、尊厳という名をひとり人間のみが唱えることはできない。なぜなら、あらゆる存在するものが、生きて、宇宙の創造に参加しているのであるから。そして、人間もそれに参与する。この場合、人間においては、その実存的自由において、他者に対して責任ある者となることができるゆえに、他者への責任を負うべきなのである。もちろん、ここでは他者とは、人間だけでなく、自然全体を指す。

かくして、他の事物、生命のなかで人間のみが優れ、尊厳あるのではない。ただ人間は他者に対する自らの責任を知りうるがゆえに、その責任を身をもって引き受けることも可能なのである。そして、その責任が果たされるときに、人間の人間たる所以即ち尊厳が現われるといえる。他の存在するものために責任を負うて生きることができるか否か、これが尊厳へ至る岐路であ

る。ということは、存在するものの中で、人間のみが破滅への道を歩む危険が高い、ということである。それゆえ、存在するものの中で、人間の尊厳のみが危ういのである。即ち、あらゆる尊厳あるものにおいて、人間における尊厳こそが実存的営為を不可欠とするのである。

かく見ると、教育はあらゆるものに尊厳があること、人間はその尊厳を守り、創造することによって、初めて自らも尊厳あるものになることを語るべきであろう。

注

- (1) Scheler, M. Die Stellung des Menschen in Kosmos, Nymphenburger Verlagshandlung, München, 1947. p. 92
- (2) ハイデガー『形而上学とは何か』大江精志郎、理想社、昭和36、p. 73
- (3) Russell, B. *Mysticism and Logic and Other Essays* Allen & Unwin, 1963, p. 42
- (4) 河合雅雄『森林がサルを生んだ』朝日新聞社 1992
- (5) Buber, M. *Werke, Erster Band*, Kösel - Verlag und Verlag Lambert Schneider, München, 1962, p. 79
- (6) プライス編『ホワイトヘッドの対話』みすず書房、1980、p. 531
- (7) 同、p. 531
- (8) 同、p. 531
- (9) Whitehead, A. N. *Process and Reality, An Essay in Cosmology, Corrected Edition*, New York, The Free Press, A Division of Macmillan Publishing Co., Inc. 1978, p. 18
- (10) Russell, B. *Portraits from Memory and Other Essays.*, George Allen & Unwin, London, 1956, p. 149
- (11) ハーツホーン『ホワイトヘッドの哲学』松延慶二他訳、行路社、1989、p. 10
- (12) Whitehead, *Adventures of Ideas*, The Macmillan Company, New York, 1956, p. 237 - 238
- (13) *Ibid*, p. 238

- (14) Whitehead, *Symbolism, Its Meaning and Effect*, Cambridge At The University Press, 1958, p.20
- (15) Whitehead *Process and Reality*, p. 239
- (16) Whitehead, *Science and The Modern World*, Cambridge at the Umversity Press, 1953, p. 187
- (17) Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 241
- (18) Whitehead, *Process and Reality*, p. 85
- (19) 多田富雄 『免疫の意味論』 青土社、1993
- (20) 有機体の哲学はスピノザの思想図式に類似しているともいわれる。「しかし、有機体の哲学は、思考の主語—述語形態 (subject - predicate form) を捨てている点で異っている。」 (*Process and Reality*, p.) とホワイトヘッドはいう。つまり、有機体の哲学は、事実についての究極的特性描写としての「実体—属性概念」を無効にしているかである。
- (21) Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, 5, 6
- (22) *Ibid*, 5. 62
- (23) *Ibid*, 6. 44
- (24) Whitehead, *Process and Reality*, p. 7
- (25) 河合雅雄 『子どもと自然』 岩波書店、1990
- (26) J. キャンベル、B. モイヤーズ 『神話の力』 飛田茂雄訳、早川書房、1992